功績調書

(一) 同人は、昭和十七年九月東京帝国大学文学部国史学科を卒業後、同大学史料編纂所員・大分陸軍少年飛行兵学校教官を経て、大分県公立高等女学校教諭に奉職し、昭和二十三年十二月から大分師範学校に勤務し、以来今日まで社会学等を担当し、研究調査に没頭し、優れた研究業績を残し、また大学行政に参与し、手腕を発揮してきた。

同人の研究分野は、社会学が中心であって、その学風はウェーバーの学統を受け継ぐ歴史社会学であり、その多方面にわたる関心の深さと、調査研究に十全を期す態度は大方の認めるところであり、ウェーバー学者として広く学会に知られている。

同人は、歴史社会学の立場から地方史の研究を多方面にわたって行っており、『大分県史料』の刊行を全国にさきがけて計画し、その編纂に努力を傾注し、例えば宇佐宮関係の古文書にみるような難解な字句の解読に、また断片史料の接続・復原に精力的に活動した。また、大分県地方史研究会の創立にも積極的に努力して会誌の発行に当り、歴史社会学の側から新生面を開いた。創刊号に載せられた「日本史の地域性‖西船・東馬‖」は、その構想力の新鮮さをもって、一躍注目されるところとなったが、これは、同人のその後の活動の基礎となったとともに、今日ではすでに定説化するに至っている。なお、大分大学の出発にあたって発刊された『紀要』の第一号に、耶馬台・宇佐「山戸」説を問うて以来、さらに詳細・緻密な宇佐邪馬台説を展開し、学界に一石を投じたことはもはや周知のところである。

同人は、また歴史社会学の立場から、質の問題とあわせてたえず量的考察にも注意をはらい、県下の農・漁村の社会調査及び遺跡の発掘調査を数多く行っており、なかでも滝尾・羽田地区や雄城台における「弥生式・土器窯」の発掘報告、丹生「旧石器」の発見報告などは、いずれも日本で初めてのこととして学界で高い評価を受けている。なお、文部省により特定研究費を受けて行われた「大野川」総合研究・「豊後水道域」総合研究・「国東半島」総合研究に、研究団長として参画し、

自らの社会調査の経験を生かし、後進の指導等にも当たり、総合研究を実りあるものにするため大いに貢献した。

同人は、多方面に関心を示し、独自の着想を展開し、綿密な資料調査を通して多くの研究成果をあげてきており、また県・市の文化財委員を永く勤め、四十八年には大分市から文化功労賞を受けている。

(二) 定年前から文部省特定研究を続行。昭和五十二年刊の『大野川』(調査団長)、次で五十五年刊『豊後水道』(同団長)、ひきつづいて、五十八年刊『国東半島』六十一年刊『大分川』、さらに六十三年刊『山国川』にと、各回にすべて参加して、県内諸地域の社会・文化の特性を明らかにすることに努めた。

(三) また、定年前からひきつづいて、県内にのこる物語、伝承などにみられるカリスマ的特性の追求に心がけた。M・ウェーバーの「支配の社会学」の一形態たるカリスマを武器として、中心の大分から県内各地にみられる〝百合若大神の物語り〟、県南にのこる〝炭焼小五郎〟(臼杵、三重)、また〝祖母山の大蛇神婚譚〟(あかがりの大弥太)などの残存と変容、そして現地の採鉱冶金のあと、それらの結び付きの解明を史跡と伝承との合理的理解のもとに推し進めた。

(四) 宗教社会学と古代政治社会の解明に、とくに〝天道信仰〟(太陽崇拝)が大きな役割りをもつこと、とくにウサ八幡と、古代天皇(日の御子である)の活動の理解に有効なことに、研究の新生面をひらいて、追求をすすめた。古記録や伝承のみでなく、神社、山岳、巨石、古墳などの地理的位置(方位的な関係づけ)を通して、これまでに想像もしなかった新生面を次々と開いた。天道信仰の地理(地図)上にみられる天道線の濃密な相互関係の存在を指摘し、さらにウサ八幡を宗とする鍛冶の文化(採鉱冶金〜銅・鉄・朱など)と、渡来技術集団との関係を明らかにし、日本の古代社会、文化に新しい光を及ぼすことを強調した。